

イエスの一日

マルコの福音書 1章 29-39節

はじめに

私たちの教会では、毎月テーマを決めています。そして毎月第一週の礼拝の説教では、その月のテーマに従ってお話しています。1月のテーマは、「デボーション」です。デボーションとは、毎日神様に祈り、聖書を読むことです。

今日の聖書箇所には、イエス様のある一日の活動が書かれています。イエス様は、一日をどのように過ごされたのでしょうか。

1. 安息日の午後

29節を見ると、「**一行は会堂を出るとすぐに、シモンとアンデレの家に入った。ヤコブとヨハネも一緒であった**」とあります。この日は「安息日」でした。当時の安息日は、「土曜日」でした。イエス様は、安息日の午前中に「会堂」で説教をされました。人々は皆、イエス様の説教に驚きました。今まで聞いたこともないような説教で、非常に権威のある説教のように感じたからです。イエス様が説教をしている途中に、悪霊につかれた人が突然叫び出すという出来事がありましたけれども、イエス様は「黙れ。この人から出ていけ」と言われて、悪霊を追い出されたのです。会堂に集まっていた人々は、イエス様の説教と悪霊を追い出す力に非常に驚いて、イエス様の評判はすぐに広まっていったのです。

そのような午前中の会堂での出来事があった後に、イエス様はペテロとアンデレの家に、ヤコブとヨハネと一緒に行かれたのです。お昼ご飯でも食べに行ったのでしょうか。すると、ペテロの姑が「**熱を出して横になっていた**」のです。ここから私たちは、ペテロは結婚していて、奥さんもいて、奥さんのお母さんとも一緒に暮らしていたことが分かります。

ペテロは「漁師」でした。しかしイエス様に「**わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしてあげよう**」(マルコ 1:17)と言われて、漁師を辞めてイエス様の弟子となったのです。そしてイエス様と一緒に宣教の旅を始めたのです。

ペテロは、仕事を辞めて、家族のもとからも離れて、イエス様の弟子となっていったのです。ペテロは後に、「**私たちはすべてを捨てて、あなたに従って来ました**」(マルコ 10:28)と言っています。ペテロは仕事も捨てて、家族も捨てて、イエス様に従ったのです。

ペテロの家族は、このことをどう思ったのでしょうか。ペテロが仕事を辞めたために、収入もなくなったでしょう。今後の生活の不安もあったでしょう。ペテロを弟子として誘ったイエス様に対する不満もあったかもしれません。

しかしイエス様は、そのようなペテロの家族の家に訪ねて行かれるのです。そしてそこで、熱を出していた姑を癒されるのです。すると姑は、イエス様をもてなし、イエス様に仕える

ようになるのです。ここには、ペテロの妻は出て来ませんが、Ⅰコリント9：5には、ペテロが信者である「妻」を連れて宣教旅行をしていたとありますから、ペテロの妻もイエス様を信じるようになったのです。

ここから私たちが教えられることは、イエス様は、イエス様を第一にして従う者たちの家族をも顧みてくださる、救ってくださるということです。使徒16：31には、「**主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます**」とあります。またイエス様は、「**わたしのために、また福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子ども、畑を捨てた者は、今この世で、迫害とともに、家、兄弟、姉妹、母、子ども、畑を百倍受け、来るべき世で永遠のいのちを受けます**」(マルコ10：29-30)と言われました。イエス様のために、家族や財産を捨てた者は、この世で迫害を受けますが、しかしそれ以上に、家族や財産を百倍受ける、そして死後には永遠のいのちを受けると約束されています。イエス様のために捨てれば、逆に得るようになるのです。逆に手放さなければ、それを失うようになるのです。イエス様は言われました。「**自分のいのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音のためにいのちを失う者は、それを救うのです**」(マルコ8：35)。

私たちがもし、イエス様を第一にして従っていくなら、イエス様は私たちの家族をも顧み、救ってくださるのです。私たちがすべきことは、家族を救おうとすることではなく、イエス様に従うことです。そうすれば、イエス様が家族を救ってくださるのです。

2. 夕方から夜

イエス様がペテロの家を訪ねたのは、安息日の午後でした。この午後、イエス様はペテロの家族や弟子たちとの交わりを楽しんだのでしょう。夕方になると、ペテロの家には、病人や悪霊につかれた人たちが集まって来たのです。そのことが32-34節に書かれています。

ユダヤの日付は、夕方に代わります。日が沈むと一日が終わり、新たな一日が始まるのです。この時、なぜ病人や悪霊につかれた人たちが夕方に集まって来たのかというと、安息日が終わったからです。安息日には、命に関わる病気以外は癒してはならないことになっていました。そこで、命に関わるわけではないけれども、病気や悪霊に悩まされている人々は、安息日が終わった途端に、癒やしを求めてイエス様のもとに集まって来たのです。

するとイエス様は、集まって来た人々を次から次へと癒していかれたのです。夕方から夜にかけてです。次の日の朝も、人々がイエス様を探していたと37節にありますから、イエス様は決して集まって来た全員を癒すことができたわけではありません。しかしそれでも、夜遅くまで人々を癒されたのではないのでしょうか。

この日イエス様は、午前中は会堂で説教をされ、悪霊を追い出し、午後にはペテロの姑を癒し、ペテロの家族と弟子たちと交わりの時を持ち、夕方から夜にかけて多くの人々を癒されました。これが、ある日のイエス様の日でした。

3. 翌日の早朝

35-39 節には、次の日の早朝の出来事が書かれています。35 節にはこうあります。「さて、イエスは朝早く、まだ暗いうちに起きて寂しいところに出かけて行き、そこで祈っておられた」。イエス様は前日の夜、夜遅くまで人々を癒されましたけれども、次の日の朝は、早く起きて「祈りの時」を持たれたのです。私たちはここから、イエス様の一日は「祈り」から始まるということを知るのです。イエス様は、日中は絶えず人と一緒に過ごされました。弟子たちや癒しを求める人々と過ごされました。しかし早朝だけは、一人になられたのです。一人になって祈り、父なる神様との時間を過ごされたのです。

しかし人々は、イエス様を一人にはしてくれません。イエス様が祈っていると、ペテロと弟子たちがやって来て、「皆があなたを捜しています」と言うのです。おそらく早朝から、ペテロの家に人々が癒しを求めて集まって来ていたのです。人々の求めはあまりにも大きく、早朝から夜遅くにまで至っていたのです。

するとイエス様は、38 節でこのように言われます。「さあ、近くにある別の町や村へ行こう。わたしはそこでも福音を伝えよう。そのために、わたしは出て来たのだから」。イエス様は、別の町や村へ行こうと言われます。ペテロの家があった「カペナウム」の町には、まだまだたくさんの人々が、イエス様の癒しを求めて集まっていました。しかしイエス様は、彼らを置いて別の町や村へ行かれるのです。なぜならイエス様の使命は、多くの町や村で「福音を伝える」ことであったからです。イエス様は、そのために「出て来た」と言われます。イエス様は、「福音を伝える」ためにこそ、父なる神様から遣わされて来たのです。

イエス様はもちろん、病人や悪霊につかれた人々を癒されました。それは「神の国」の力を現すためでした。しかしイエス様の第一の使命は、「福音を伝えること」であったのです。これは、教会も同じです。教会は、人々の弱さに仕える働きをします。そのためにこそ、「執事」という職務があります。そのことを通して、私たちは「神の国」を現します。しかし教会の第一の使命は、「福音を伝えること」であるのです。

イエス様は、早朝の「祈り」の中でこのことを確信していかれました。人々の求めはあまりにも大きい、しかし人々の求めに応えることだけがイエス様のやるべきことではなかったのです。人々の求めに翻弄される中で、イエス様は「祈り」の時を持たれました。そしてその「祈り」の中で、ご自分がやるべきこと、ご自分の使命を改めて確信されていったのではないのでしょうか。

イエス様は十字架に架かる前も、ゲッセマネの「祈り」の中で、ご自分の使命を確信されていかれました。ご自分の使命は人々の罪を贖うために十字架に架かることであると。

「祈り」は、私たちが今やるべきこと、自分に与えられている使命を改めて思い出させてくれる時です。私たちは毎日忙しく生活しているかもしれません。やらなければならないことに翻弄されているかもしれません。人の期待に応えること、人に求められることに一生懸命になっているかもしれません。しかし私たちは、「祈り」の時を持たなければ、自分が今本当にやるべきことを見失ってしまうのではないのでしょうか。「祈り」の時こそ、神様から与えられている使命、自分が本当にやるべきことは何なのかを思い起こさせてくれる時で

はないでしょうか。

「祈り」は、私たちから神様に語りかけるものです。神様からの語りかけは、「聖書」の御言葉から私たちに与えられます。「祈り」と共に「聖書」を読む時をもって、神様との時間を持つ時に、私たちは自分の使命、自分が今やるべきことを示されていくのです。この「デボーション」の時がなければ、私たちは日々、会社や学校や家族に求められることに翻弄されて、自分自身を見失ってしまいます。人々の求めはあまりにも大きいです。私たちは、人々の求めに応じて生きるのではなく、神様の求めに応じて生きていかなければなりません。私たちは、人々の求めに応え、人々の求めを断る基準を持たなければなりません。私たちの生活の基準は、「神様の言葉」である「聖書」にあります。「聖書」に立って、自分のやるべきこと、自分の使命をはっきりさせて、地に足をつけて歩いていかなければなりません。私たちは、人の求めに応じて生きるだけの受身の生き方ではなく、神様からの使命に生きる主体的な生き方をしなければなりません。

イエス様は決して人々の求めに応えるだけの生涯ではありませんでした。神様からの使命に生き、福音を伝え、十字架に架かれたのです。イエス様は、神様からの使命に真っ直ぐに生きられたのです。そのために「祈り」の時を大切にされたのです。

おわりに

新しい年が始まりました。私たちには日々やるべきことがたくさんあります。しかし本当に私がやるべきことは何なのかを見極めることは大切です。私たちは人々の求めに応じて生きるだけではなく、神様からの使命に生きなければなりません。それを見極めるためには、「祈り」の時間は欠かせません。また「聖書」を読む時間も欠かせません。忙しいと私たちは、「デボーション」の時間を犠牲にしてしまいます。しかし「デボーション」の時間を犠牲にすると、私たちは本当に自分がやるべきことを見失い、自分自身を見失ってしまいます。私たちは、忙しい時にこそ「デボーション」を大切にしなければなりません。長い時間取る必要はありません。週報に載せている聖書日課は、一日一章以下です。5～10分もあれば読めます。祈りの時間は、通勤の途中でも、通学の途中でもできるはずで、一日は24時間あります。その内の数十分を神様との時間として過ごすのは難しいことではありません。

私は毎朝、教会に来ると「デボーション」から始めます。聖書日課に従って聖書を読み、ウェストミンスター信条を一問ずつ読みます。そして短く祈りの時を持ちます。私の「祈り」の時間で重要なのは、夜の散歩の時です。だいたい毎日夜に30分～1時間散歩をします。その時に、家族のため、教会のために祈ります。この「祈り」の時に、心の中に蓄えられた御言葉が、私に語りかけてくることもしばしばです。

ぜひ皆さん今年は、毎日少しでも「デボーション」の時を持ちましょう。イエス様ですら「祈り」の時を大切にされたのですから、私たちが「祈り」の時を持たなかったらどうなるでしょうか。「祈り」は、私たちが本当にやるべきことへと絶えず立ち返らせてくれます。今年一年間、本当にやるべきことをやる一年にしていきましょう。

天におられる父なる神様。

新しい年が始まりました。今年一年間、あなたとの交わりを大切にすることができますように。毎日あなたとの時間を少しでも持つことができますように。どうか私たちが、人々の求めに振り回されるのではなく、本当にやるべきこと、神様からの使命に生きることができるように導いてください。

この祈りを、私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。